

ボランテイヤと私

何かを求めて

◇ノートテイク◇

音声情報をリアルタイムで伝達

「ノートテイク」というボランテイヤを聞いたことがあるだろうか。まだ、ほとんど知られていないのではないだろうか。

聴覚に障害を持つ学生が講義に参加できるように、音声情報をリアルタイムで書いて伝える「通訳」のことである。ただ授業で書き示された内容を書き写すのではない。「今、先生のジョークに皆が笑った」「誰かの携帯電話が鳴っている」など、すべての「情報」をできる限り書いて伝えるのがノートテイクである。速記に近いと言ってもいいだろう。

12人の学生が聴覚障害者を支援
大学も今年度から予算化し後押し

本学多摩キャンパスにも聴覚に障害を持つ学生が在籍しており、現在12人の学生と大学院生が彼

らを支援している。

「本学でのノートテイクは去年から始まったものです。去年は学部事務室で行われていたのですが、今年度からは予算がつき学事部が活動を取りまとめて行うようになりました。今年から派遣職員にも来てもらっています」と、学事部担当部長の横本五朗さんは説明してくださった。

支援学生のひとり、高橋司さん(経済学部3年)は、「ここまで大学が動いてくれたのには驚きました。今年からボランテイヤ学生には謝礼の図書カードもくれるようになったんですよ」と、大学がノートテイクのボランテイヤ育成に本腰で取り組み出したことを歓迎する。

高橋さんは去年からノートテイクカーとして活動している。2つのボランテイヤサークルに入っていて、1年次には視覚障害学生のサポートもしていた。高橋さんにボランテイヤに携わる、その思いを伺った。

「来てもらえるだけで嬉しい」「ひとりではきつい」と聴覚障害者

去年卒業した彼のゼミの先輩は、聴覚障害者を持ちながらも一切のサポートなしに本学を卒業したという。そんな現状を目の当たりにした高橋さんは、「どうして大学側のサポートはここまで手が届かないんだらうって、ずっと疑問に思っていました」という。

サポートがないときは、拡聴器で聞き取るように努め、後日、友人にノートを借りて要点を引き



聴覚障害を持つ町田剛洋さん＝法学部2年

写す。講義についていくには、内容を理解するとかの前に先生の話をつかみ取る自助努力が必要になる。

聴覚障害を持つ町田剛洋さん（法学部2年）は、「来てもらえるだけで嬉しい」とボランティア学生に感謝している。

しかし、ノートテイクのボランティアは緒に就いたばかりで、期待に応えられるだけの態勢にはない。現在、支援を受けている聴覚障害者は、町田さんを含め2名。それに対しボランティア学生12人では、彼らの講義を100%支えきれないのが実情だ。

町田さんは補聴器をつけているので対面での対話は可能だ。しかし教室での講義をひとりで聞く

のはムリがある。「ひとりで受けている授業もいくつかありますが、やっぱりきついですね」と、本音が漏れる。

支援学生不足が大問題

「やるう」という熱意が大事

高橋さんら支援学生はノートテイクボランティアの運営にも従事し、活動について学生同士で話し合いをしている。大きな問題は、やはり支援学生の人数不足だ。学事部では、6月16日に第2回ノートテイク講習会を開くなど、積極的に支援学生を増やそうとしている。現在、ボランティアに参加するには、この講習会に出席、受講することを条件にしている。

支援学生の高橋司さん＝経済学部3年

これに対し高橋さんは、「確かに制度も大切ですが、講習会に参加できなくても『やりたい』といってくる学生も何人かいるので、そういう人を受け入れてあげられたら、いいな、思います。講習会に参加しても、活動には参加してくれない人や、約束を下タキャンするなどの例もありますからね。結局は『やるう!』という強い意思がないとうまくいきません。その熱意を尊重したいんです」と、熱い思いを語る。

障害者と同じ目線で考える

「困っているのは今。だから今やる」

「彼らはただ、目や耳が悪いだけ。同じ学生として、彼らの足りない面を補うのはあたりまえのことです。彼らが困っているのは今なのだから、今やるしかない。『来年やる』なんて言っていたら遅いんです」

高橋さんは、まるで自分のことのように、障害者と同じ目線に立つて考える。「ICレコーダーの導入も検討中なんですよ」と、運営を向上させるための課題に積極的に取り組んでいる。

「ノートテイクは簡単ではありません。1時間半の講義の全ての情報を伝えるのは不可能で、せいぜい20%くらいしか伝えられない。難しい専門用語が出てくると、『お手上げ』で、『わかりません』と書くしかないです。その20%に入れる大事なポイントを自分で見極めるっていうのが難しい」
「どれだけ短いことばで上手く伝えられるか。フル回転で頭を使う1時間半だ。」

普段何気なく聞いている大学の講義が、当たり前の世界ではないと知ったとき・・・私たちにできる手助け、それがノートテイクボランティアだ。高橋さんは、始まったばかりの法学部のノートテイク支援が、今後どこまで広がるかに期待を寄せている。

（学生記者 山崎綾香＝法学部3年）

